

平成 27 年度

ソニー幼児教育支援プログラム応募論文

科学する心を育てる

— “浮く” と “あがる” の違いって? —



社会福祉法人 晴朗会 すくすく保育園

目 次

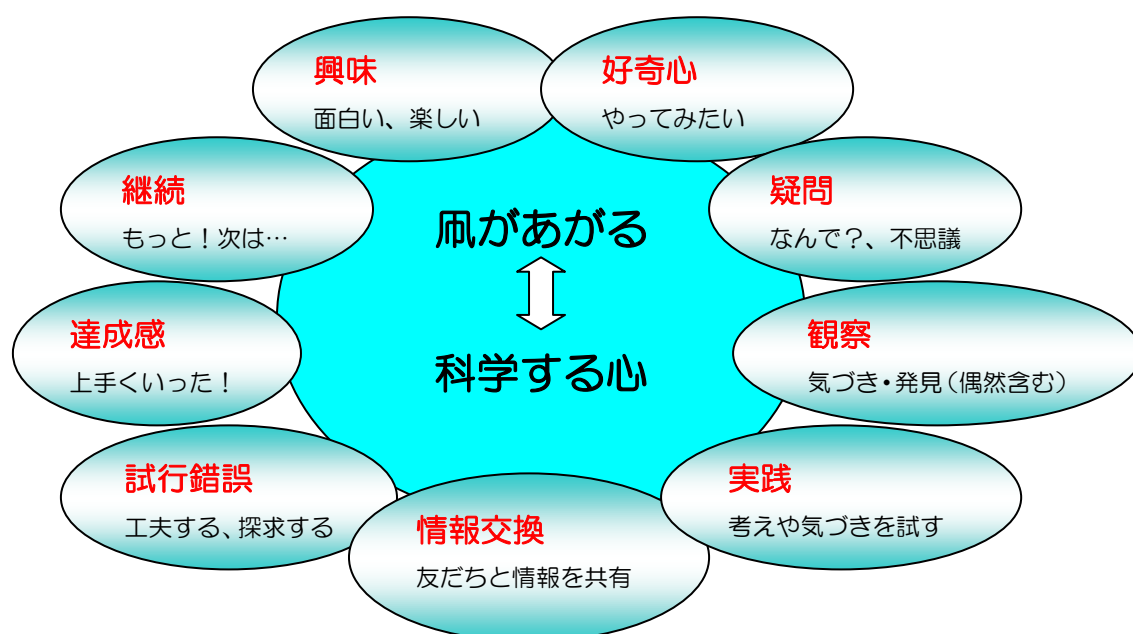
1	はじめに	1
2	なぜ“凧あげ”なのか？	1
3	各年齢における凧作り制作と凧あげの実践事例	2
	(1) 0歳児クラスの実践事例 「持っているだけで満足！」	2
	(2) 1歳児クラスの実践事例 「ちゃんとあがってるかな？」	2
	(3) 2歳児クラスの実践事例 「先生の真似をしよう！」	3
	(4) 3歳児クラスの実践事例 「走らなくてもあがったよ！」	4
	(5) 4歳児クラスの実践事例 「風のおかげや！」	6
	(6) 5歳児クラスの実践事例 「失敗しても再挑戦！発見・工夫が面白い！」	8
4	まとめ	17
5	今後の課題と計画	18

1、はじめに

本園はここ数年、「科学する心が育まれる場面を捉えて考察する」のコメント用紙を持ち、保育士が子どもの行動や表情・言葉から「なぜ?」「どうして?」と深く考察することを続けてきた。コメント用紙にエピソードを書くことによって、今まで気がつかなかったことにも気がつくようになったり、これはどのような思いでしているのかを深く考えるようになったり、ささいなことにも疑問を持つようになったりと、子どもだけでなく、保育士自身の行動や考え方にも、大いに変化が現れている。また、科学する心を見つめる研究をすることで、自身の保育を振り返るきっかけになり、新たな知識も得ることができ、子どもと共に科学する心が育まれていると実感している。これまでの取り組みの中で、各クラスからたくさんのコメント用紙が集まり、それぞれ年齢の領域のねらいに照らし合わせることで、各年齢における本園の子どもの姿や成長発達がよく捉えられた。このことから今年度は一つの遊びにテーマを絞って、年齢別の子どもの姿を捉え、心の動きや科学する心を育む場面を考察し、主題につなげてまとめることにした。

2、なぜ“凧あげ”なのか？

本園では毎年冬になると、各クラスで凧作り制作と凧あげを実施している。その取り組みの様子から、風を感じて遊ぶだけでなく、自分で色々なことに気づいたり試したり工夫する姿が見られ、回数を重ねる度に、遊び方や心の動きにも変化や深まりが見られた。遊ぶ中での偶然の結果においても、様々な発見や体験につながっており、年齢ごとに“おもしろい!”と感じる場面は違うが、私たちは“凧あげ”の取り組みをすることが、“科学する心”と結びついているのではないかと考えた。各年齢で遊び方や感じ方などそれぞれ特徴が見られるので比較し、また、凧が“あがる”とはどういうことなのか、そこにポイントを絞り、深くさぐってみることにした。



3、各年齢における凧作り制作と凧揚げの実践事例

(1) 0歳児クラスの実践事例 「持っているだけで満足！」

0歳児クラスは発泡スチロールのトレイ、折り紙、ケント紙、傘袋で凧を作った。出来上がった凧を保育士が部屋で揚げてみると、くるくると回る凧に興味を示していた。戸外に出たとき、子どもたちに凧を持たせると、凧を引きずって歩いており、持って歩くだけで満足していた。また、傘袋の凧は、空気で膨らんでいる部分を足で踏んで遊ぶ姿が見られた。保育士が凧あげをして見せると、子どもたちは笑っていたが、保育士が走るだけでも笑う子どもたちなので、走る姿と凧のどちらが面白かったのかは、わからなかった。



【考察】 0歳児はまだよちよち歩きがほとんどなので“凧あげ”という楽しみ方はできないようだが、持っているだけで楽しいようである。また、凧を持つと自分の後ろに“付いて来る”という事にも面白みを感じている。傘袋の凧では、空気の膨らみに**興味**を示し、足で踏んだ結果“踏むとへこむ”ことが、凧があがる様子よりも、0歳児には**面白かった**ようである。 (**興味・好奇心**)

(2) 1歳児クラスの実践事例 「ちゃんとあがってるかな？」

1歳児クラスでは、スーパーの手提げ袋にケント紙で作った目と口を自分たちで貼って、凧を作った。ほとんどの子どもは凧を持って走るだけで満足している様子だったが、M児はチラチラと後ろを見ながら走っており、凧があがっているか、確認しているようだった。前を向いて



走ると少しあがっていたが、振り向くとスピードが落ちて、凧も下がってしまうので、M児自身は凧が浮いているところは見れずじま이었다。それでも諦めずに頑張っているM児が印象的だった。一方、K児は最初、凧糸を結んだ腕を下に向けて走っていた。どうするのかを見守るべきだったが、「バンザイして走ったらもっと飛ぶと思うよ」と教えると、両手をバンザイにして一生懸命走っていた。凧あげの時は“しっかりと手を挙げて走る”ということを学んだようである。

そうか！バンザイするとあがるんだ！



【考察】 1歳児では友達と一緒に凧を持って走り回るだけでも楽しいようだが、凧があがっているかを気にする姿が見られるようになってくる。K児は保育者に走り方のコツを教わったが、本来なら、どのようにすれば凧があがるのかは、自分で色々試して気がついていくものだと思う。今回は保育者の願いの方が強く、やり方をすぐに教えてしまった事がその後の反省としてあがった。つい「こうするといいいよ！」と教えたいくなるが、子どもの「**なんで**（あがらないんだろう）？」を大切に、そこからどのような行動をとるのか“見守ること”の大切さを改めて感じた。（興味・好奇心・疑問）

（3）2歳児クラスの実践事例 「先生の真似をしよう！」

2歳児クラスでは、その年の干支だった羊を保育士がコピー用紙に書き、それを個々に色塗りしたもので凧を作った。形は3角形と長方形の2種類を用意し、子どもたちに好きな方を選ばせた。そんな中、模様（羊）を見て「タコじゃないの？」と疑問を抱くR児。R児は、フランス生まれのフランス育ちで、この4月に入園してきたばかりである。月齢の高い子どもなので“タコ”は知っていたが、“凧”は見たこともなければ、凧あげをしたこともなかったようなので、今回が初体験となる。凧制作後は、「た

こあげしたい！」とどの子どもも凧あげを楽しみにしていた。凧あげ当日は、凧を手にとって、ただひたすらに凧をもって走り回っている姿がよく見られた。R児も見よう見まねで友だちと一緒に楽しんでいる。あがっていないことに気がついた数名は、「あれ？」と不思議に感じている顔をしている子どももいたが、そのまま走り続けていた。一方では、保育士の様子を真似して手を上にあげて走ろうと意識していた。そのうちだんだんと走り疲れてやめる子どもが増えてきたが、凧をあげようとして頑張っている子どももいた。

〈とりあえず走ってみる子〉



〈保育士の真似をして手をあげて走る子〉



【考察】 2歳児くらいになると、作った物で早く遊んでみたい！と思う子どもが多くなってきている。また、凧を持ってとりあえず走るだけの子どもがいる中、どのように走ればいいのかを教わらなくとも自ら気づく子どもも出てきて、保育者の姿を真似して、手をあげて走る子どももいる。凧を引きずっている子どもは、「あれ？」と不思議そうにする姿があるものの、「面白いから、（あがらなくても）まあいっか！！」と感ずるようを感じる。色々な言葉を覚えてきているので、タコと凧の違いが分からず、“たこ”という言葉に不思議さを抱いた子どももいたようで、子どもらしいなと感じた。年齢を重ねるごとに気づきに深まりがあるようで、発見が多くなってきている。（興味・好奇心・疑問・観察）

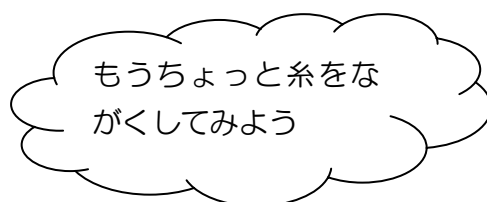
（４）3歳児クラスの実践事例 「走らなくてもあがったよ！」

3歳児クラスでは、5月から風を感じるような遊びを取り入れていた。担任の“風を感じて遊んでほしい”という願いによるもので、傘袋に目やうろこのシールを貼ったものを、鯉のぼりに見立てて、空気を入れてゴムでしばり、紐を付けてみた。作る時や作り終わった後は、部屋で持ち歩いたり、走ったりしていたので、国分公園へ持って行った。最初はみんな“遊具の周りを散歩しよう！”ということで、喜んで持って走って

いたが、1周すると、ほとんどの子どもが「いらない」と言って保育士に渡し、遊具で遊び始めた。4, 5人はその後も持ったままだったが、公園を探索し始め、あっという間に邪魔になってしまっ「いらない」と保育士の所に持って来た。ビニールがすぐにペチャンコになってしまっ、とばなくなってしまっからか、興味が失せてしまっようである。

そのような出来事があったので、今回の凧作り制作は、“飛ぶものを作りたい！飛ばす楽しさを知ってほしい！”という願いにより、エアークッション（プチプチ）で凧を作ることにした。大・小同じものを見本で作り、12月24日、園庭の遊びの時に、興味を持った子どもだけで遊んだ。「やりたい！」と言ってきたのは女の子4名程。他の子どもは興味を示してチラチラ見ているものの、遊具遊びや砂遊びに夢中だった。凧あげに面白みを感じた子は何度もプチプチ凧で遊んでいたが、大・小のこだわりはなく、“遊べればいい”という様子だった。そんな中、M児だけ「私、小さいのがいい」と言う。M児は、大・小どちらの凧も試して、あがり方を比較していた。どうやら小さい方が高くあがったようである。後日1月5日、凧作り制作をした。制作は好きな子が多く、みんな楽しんで作っていた。大・小の大きさの好みは、だいたい半分づつに分かれた。M児はやはり小を選んでいった。1月19日、国分公園で凧あげをした。遊具の周りをぐるっと1周回ると「もうやめる」という子がほとんどであった。その後も何度か遊んだが、すぐに飽きてやめてしまう。1月29日、なぜか急に3, 4人が少し長く走って遊ぶようになっていた。凧あげに興味を失いつつあった子どもたちが、なぜ遊ぶようになったのか疑問を感じたので、じっくりと様子を見ることにした。よく見ると、凧糸を長くして、じっと凧をもっているY児がいた。走らなくても持っているだけで、凧があがっていた！その日は凧あげ日和だったのか、たまたま風が強い日だったのだ。その様子を見て、“今日なら高くあがるかも”と期待が膨らみ、数名が試していたのかもしれない。

数日、風の強かった2月19日、寺田町公園のグラウンドで再び凧あげをした。男の子と女の子に分かれて、凧あげを行い、見ている子どもたちには「誰が一番高くあがるか見ててね」と伝えた。風が強くてあがりやすいことと、友だちに見てもらうことが嬉しいようで、みんな夢中で走っていた。





<3歳児になると全員手をあげて走っている>

【考察】 年齢的になんでもすぐに興味を持つが、興味が失せるのも早いようで、よっぽど面白くない限り、遊びの継続が難しいようである。上手く出来ないと、“自分で何とかしてみよう！”というより、周りの大人に“なんとかして！”と頼ってしまう傾向が見られたので、「どうすればいいのかな？」と自らが考えていけるような関わり方が必要なのではないかと感じた。“興味を無くしたから”ではなく、行き詰った時には、さりげなく次の活動につながるようなきっかけを与えたり、少しの援助や環境構成の工夫をすることで、興味や活動がもう少し継続するように思う。また、大・小で風のあがり方の違いや、“走らなくても、風さえあれば風があがる“ということに気がついたこと、そして、風が吹くのを待っている友だちの様子を見ていたことは、物事に対する観察力が、日々の保育の中で自然と鍛えられ、年齢を重ねるごとに身についてきているように思う。興味を失っていたことも、仲のよい友達が楽しそうに遊んでいたりと、うまく成功したりすると、“やってみたいな”と思うようで、友だちから影響を受けることも多い。今回は、友だちのことをよく見ていたという事から、やっと楽しさが味わえたのではないかと感じる。 (興味・好奇心・疑問・観察・実践)

(5) 4歳児クラスの実践事例 「風のおかげや！」

4歳児クラスでは、コピー用紙と折り紙で連風を作った。基本の型は保育士が作り、色や模様は子どもたちの発想に任せた。1月9日、風作り制作をする。子どもたちは真っ白な紙にどんな模様を描くか考える。好きなもの描く子もいれば、しま模様にする子もいる。「大きく描けたね」と保育士が一人の子に声をかけると、「遠くでも見えるから」という返事があった。一方、白い所が見えなくなるまで、一生懸命に虹色を塗る子もいた。きれいに仕上げるために、集中して塗っていた。また、基の風とは別に、折り

紙でも小さい凧を作った。色の組み合わせは自分の好みで選んでいた。

仕上がった個人の凧に保育士が凧糸を通して、その場で軽く試していると、子どもたちが興味を示して寄ってきた。



保「どうやったらあがると思う？」

子「もっと走ったら？」「公園でするねんで」

保（廊下を走ると凧があがる）「ちょっとだけあがった」

子「やりたい！」

保「明日晴れたら公園にいこうか！」

きれいにしあげたいな！

凧あげ大会や！
よ～いドン！



このことで凧あげへの期待が高まったようで、翌日を楽しみにしていた。凧あげをする想像が膨らんだようだった。

1月19日、国分公園に凧あげに行った。この日は程よく風が吹いており、走らなくても凧があがっていた。また、連凧にしたことで、風が少しであってもゆるやかにあがった。折り紙で作った小凧は“あがる”というよりクルクルと回っていた。「しっぽがひらひらしてる」「あがった！」など、嬉しそうな声がきこえる。「競争しよう」と誰かが言い出すと、すぐさま、かけっこと同じ

ようにスタートラインを引き、凧を持って並ぶ。勝ち負けはない様で、凧がきれいにあがったら成功！というルールの大大会だった。普段の遊びから“競争”という考えを思いついたようである。そんな中「先生、手伝って！」というT児。保育士に凧を持ってもらおうとする。どうやら、最初から高い位置に凧があれば高くあがると考えたようで、凧を高い位置に持ってもらって、猛スピードで走っていた。また、「先生見て！何もしなくても凧あがった！」と、滑り台の階段から、風になびく凧を見せる子もいた。凧あげで走りつかれて、たまたま休憩していた場所で凧があがったので、その発見を知らせたかったようである。「すごい。きれいにあがってる。飛んで行きそうやな」「風のおかげや」と話していた。後日、稲生公園でも、ジャングルジムの上で凧あげを試していた。

先生、そこ！！
もっといてな～



飛んでいき
そう！



みて～！！
めっちゃあがっ
てる！

【考察】 本来、風力で自然にあがっていく凧だが、空高くまであがる凧の姿は、街中の公園ではなかなか経験させてあげられないのが残念である。しかし今回、連凧にしたことで風を受けやすく、少しの風でもよくあがったので、子どもたちは**楽しめた**ようである。ただ、簡単にあがってしまったので、満足してしまった子どももいたように思う。失敗や行き詰まりから**疑問**や更なる**探求意欲**が沸くのではないかと感じる。また、この時期は発表会の取り組みが保育のメインとなり、遊ぶ体験が少なかったため、もう少し早くから凧あげの取り組みをしたいと思った。4歳児くらいになると、一つの遊びでも“もっとこうした方が面白い！”と、自分たちで面白みを見出せるようになってきているように感じる。凧があがった時の事を想像して作ったり、**意見を出し合ったり**、自分なりの考えや**工夫**をする姿も見られるようになってきて、見通しをもって制作に取り組む様子が見られたので、素材を変えたり、自分で選んで作れるようなコーナーを設定すれば、もっと多様な発見があったかもしれないと思った。凧あげには風が関係しているということに**気が付く**が、高い所の方がより風を受けやすく、高くあがるのではないかと**発見**は3歳児にはない気づきだったので、さすが4歳児だなと感じた。

(興味・好奇心・疑問・観察・実践・情報交換・試行錯誤)

(6) 5歳児クラスの実践事例 「失敗しても再挑戦！発見・工夫が面白い！」

5歳児クラスでは色々な素材を数種類用意して、オリジナルの凧作りを数回行なった。これまで、どのクラスも1シーズンで1つしか作ってこなかったし、保育士が土台やデザインを考えて、子どもたちが制作していた。制作後は上手くあがるか興味を持って試してみるが、凧が浮かべば喜ぶものの、すぐに飽きてしまって繰り返し遊ぶことは

なく、興味の対象が別のものへ移っていった。今年度は同じものを何度か作ることで、新たな発想や気づきに期待を込め、子どもたちの言動の変化に着目してみた。

【風の素材】ビニール、和紙、新聞紙、ケント紙、クレープ紙、セロファン

【風の形】丸、四角、台形、三角

【支柱の種類】割り箸、ストロー、竹ひご（長さはばらばら）

【その他飾りなど】スズランテープ、シール、小さく切ったクレープ紙など

凧あげをする季節よりも少し早い 11 月中旬に第 1 回目の凧づくり制作をする。本当なら北風が吹く 1 月～2 月くらいが望ましいかもしれないが、その頃は行事が立て込んでいるので、早い時期から取り掛かることにした。子どもたちには「とびそうな凧を作ってね」と声をかけるだけで、後は子どもたちに託し、保育士は様子を見守ることにした。

O児：風をうけてあがることが分かっていないのか、紙飛行機のように飛ばせる凧を作る

K児：“凧”のイメージがつかないのか、土台のみでおわる

N児：とにかくシールやスズランテープの飾り集めをし、凧にたくさんつける

E児：支柱にほとんどテープをとめない

B児：三角を小さめに切り取り、四角と組み合わせてロケットのような形にする

Y児：盾みたいでかっこいい！という理由から丸を選ぶ

M児：「大きい方がよくとぶと思う！」と言い、様々な形を組み合わせ、大きく作る

G児：「木の形にするー！」と言い、木の形の凧を作る

G児



Y児



B児



N児



全体としてデザイン性を重視して、ハートや丸などかわいく切った形をたくさん貼り付けている子、季節感を取り入れ、雪だるまやクリスマスを感じさせる絵や飾りをつける子が多くいた。また、とりあえず手当たりしだい、何でもつける子もいたり、一方でごく少数だが市販の凧のような形や骨組みを意識して作っている子もいた。だいたい20分ほどで作り上げていた。

【考察】 廃材で物を作るのが好きなクラスなので、**楽しんで取り組む**様子が見られた。第1回目の制作だった為か、“飛ぶ凧“というよりは”見た目重視“で直感的に作っているように感じた。この時点では、また支柱の数や場所、凧糸を結ぶ場所にもこだわりがあまりみられない。毎年凧作り制作をしているからか、ほとんどの子どもがイメージを持って、**楽しみながら**作り上げていたように感じる。 (興味)

11月28日午前中、待ちに待った凧あげ第1回目を行なった。先日作成した凧を持って、寺田町公園へ。晴天だったが、あいにく風はほとんどなかった。この公園は広いグラウンドがあり、思い切り走ることが出来る。まずは、思い思いに凧あげを楽しんだ。



あちこちから「先生みて！あがってるで！」という声がきかれる。「こっちも見て〜！」と、自分の物を見てほしがる子どもが多い。走らなくても風の力を受けて、浮いているだけの凧もあるが、その様子を見て「あがった」と言う子どももいた。

【考察】 “手を上に高くあげて走る”という事は、今までの**経験**上で、どの子どもも学習しているようである。地面から少しでも浮いていると「先生、あがった！」と言う子どもが多く、“あがる”と“浮く”の違いが分かっていない様子である。 (実践)

自由に凧あげをした後は、お互いに観察をするために、1人ずつ凧あげをして、その様子を写真に収めることにした。この時点で、もうすでに数名の凧が壊れており、凧あげが出来ない状態の物もあった。



お互いに上手くあがるか、期待のまなざしで観察する。大半が少し浮く程度で、数名は凧を引きずっていた。そんな中一人だけ腕よりも上にあがっていた。「Fくんのめっちゃすごいな！」と口々に喋っており、凧あげをして思ったことや、気がついたことを口々に話す姿があった。



帰園後、撮った写真を早速プリントアウトして、5歳児クラスに持っていくと、「わあ！見せて見せて！」と人だかりが出来た。写真を見て、「これって浮いてるだけ？」「これはあがってる？」とO児とU児が保育士に尋ねる。“浮く”と“あがる”の違いに疑問を感じていた。自分と友だちのを見比べながら、その日の帰りの会で、一番上にあがったF児の作品をみんなで観察したり、その日の凧あげの写真を見ながら、話し合いをした。気がついた点を出し合ってみた。

- ・ 飾りが多いと重くなってあがらない
- ・ 手をしっかりと上にあげ、前を見て走っている
- ・ 凧系を取り付けた支柱が外れないように、しっかりとテープでとめる
- ・ 糸が両端についている
- ・ 支柱が横にも縦にもついている
- ・ 三角のセロファン紙を使っている
- ・ 風が関係している

S児とR児の凧はとてもよく似ているが、支柱の位置と糸の付け方が違っていた



話し合いを進めていく中で、2番目に高く上がったS児の凧と自分の凧を見比べて「Sくんと似てるのに、僕の凧はとばなかった」とR児が納得のいかない様子で発言した。S児とR児の凧は素材・形がよく似ていた。

2つの凧を並べて、さらによく観察してみる。すると、支柱の位置と糸の位置が違って
いるということに気がついた。

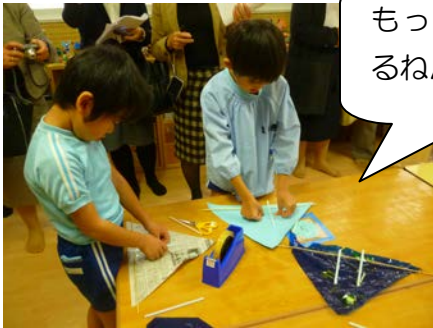
話し合いの最後に、それぞれ自分の作品のどこを改良すればよいのかを考え合い、2
回目の制作へとつなげた。

【考察】 実際に凧あげをしている時には自分自身が見えないので分からないが、写真
で見ることによって客観的に見ることが出来るので、**気づく**ことがあるようだ。また、
他のものと比べることにより、“浮く”と“あがる”の違いが**発見**できたように思う。
思っていたよりも上手くあがらなかったり、すぐに壊れたり、子どもにとって想定外
の出来事が起こったが、“面白くない”と思うよりも「**なんで?**」と不思議に思い、「次
はこうしてみよう!」と次回の制作に意気込む姿の方が多かったように感じた。5歳児
になると、自分たちで気がつくことも多く、互いに“こうした方がいいで!”など、**情
報交換**をする姿もよく見られた。今回ほとんどの凧があがらなかったで、意欲を失う
かなと心配する所もあったが、逆に上手くいかなかったことによって、“**もう一度作っ
てみたい!**”と思う子どもが多く、“どうしたらもっと高くあがるものが作れるんだろ
う?”と深く考える姿も見られ、より一層興味が増したように感じた。 (観察・
疑問・情報交換・継続)

12月4日、前回の振り返りを基に、凧作り制作第2回目の取り組みをした。1回
目の経験があるので、それぞれイメージを持って取り組んでいたように感じられる。前
回の話し合いで気づいた点を活かそうとする子が多く、土台についてはF児の真似をし
て三角形や、2番目によくあがったS児の凧と同じひし形が人気だった。また、友だち
の真似をせずに、独自で改良させた子も多く、全体的によく考えて作っているという印
象を受けた。支柱がポイントだと思ったのか、何本も取り付けようとしたり、ほとん
どの子どもが縦横につけていた。2回目ということで、アレンジする姿も出てきて、大き
く作ろうと型紙を2枚つなぎ合わせたり、自分で好きな形に切ったり、ストローの支
柱の中に凧糸を通すという新たな発想を思いつく子もいた。1回目の制作時に欠席
していた1児は、家にある凧に尻尾がついていたことを思い出して、スズランテー
プで尻尾つけた。それを見ていた数名も真似して尻尾をつけていた。前回、テー
プをあまりつけていなくてすぐに壊れたE児は、今回はしっかりとテープで支柱を
固定していた。すぐに作り終える子もいたが、飛ばすことにこだわ



る子は 30 分以上も集中して作り続けていた。



もっと飛ぶやつ作るねん！！

クリスマスっぽくしよう！しっぽ（尻尾）もつけてみよう！



☆1 回目と 2 回目の凧の比較☆



F児
前回一番よく揚がって満足したのか、なかなかとりかからず、支柱も 1 本になる

M児
素材と形を軽量化
支柱はF児と同じように付ける



O児
支柱をたくさん付ける
室内で軽く走ってみて、様子を
確認しながら作る

12月9日、凧あげ第2回目を国分公園で行なった。この日もあいにく風はあまりなかったが、子どもたちは前回よりもワクワクしており、作った凧を早く飛ばして試したいようだった。今回は壊れても直せるように、セロハンテープも持っていった。公園到着後は、まずは自由に凧あげを楽しむようにした。凧があがっている子が多くなっていて、喜んでいる姿が多く見られた。そんな中、今回のF児の凧はあがっていなかった。



明らかに1回目より多数の子の凧があがっている！

“あがっている凧”を見ることも大事ななと思ったので、担任と補助の保育士も子どもたちと同じ材料を使って、飛びそうな凧をそれぞれで作成していた。担任のS保育士はかなり本格的なものをつくっており、子どもと同様に担任自身が、この凧作り制作と凧あげを楽しんでいることが伺え、しっかりと考えて作られていることが分かるような凧であった。S保育士の自信作はみごとにあがったので、子どもたちも「すご〜い！」と興奮気味。“あがる”と“浮く”の違いがようやく分かった瞬間であった。S保育士の影響を受け、自分の凧も高くあげたいという気持ちが高まり、もっと高くあがるように、友だちに「持っといて！」と頼み、高い位置からスタートさせる姿も見られるようになる。また寺田町公園には段差がなかったが、国分公園にはあちらこちらに段差があるので、高い場所に立って手を挙げ、風が吹いて凧があがるのを待つ子も出て来



た。友達の凧が高くあがると、「1回やらして!」と、貸してもらって試そうとする姿もあった。思い思いに遊んだ後は、前回同様、一人ずつ凧をあげて、友だちを観察することにした。

自分の腕より高くあがる凧が増えたが、必ずしもあがるという訳ではないようで、さきほど高くあがったS保育士の凧も、今度は揚がらない…自身が作成した凧も、それなりにあがる自信があったが、空中でクルクルと回転して上手くあがらなかった。悔しい気持ちとなぜ空中で回るのかが気になったので、インターネットで調べてみた。どうやらクルクルと回転させないためには尻尾が必要だったようである。私自身、尻尾はただの飾りだと思っていたので、この事実を知ったときには大変驚いたとともに“凧あげ”の奥深さに触れたように感じた。



さっきはあがったのにな〜…



あれ?クルクル回ってる…

また、“風を受けて空にあがる様子”を見せたいという願いと、保育士の作った凧があがらなかった時のことを想定して、S保育士は既製品のグライダーも用意していた。せっかくなので試して見ることにした。子どもたちは、興味津々で観察を始める。自分の作った凧とどこが違うのかを比べたり、「風が入る袋をつけたらいいのか!」と子どもなりに納得しているようであった。子どもたちの期



これはあがりそうやな!

この袋になっているところに風がいっぱい入りそうやな!



待のまなざしの中、S保育士が挑戦してみた。こんなにも風を受けるところがあるのだから、子どもたちはみんなあがると思っていたら、大人である自分ですら、あがるのが当然だと思っていた。しかし、実際は全くあがらなかったのである。「やっぱり風がないからかな…」とつぶやく子もいた。

【考察】 前回、上手くあがらずに悔しい思いを経験していたり、2回目の制作で工夫や苦勞をしたことにより、喜びが1回目の時よりも大きかったようである。また、実際に“あがっている凧”を目の当たりにして、“浮く”と“あがる”の違いを実感したように感じる。凧のあげ方も1回目にした時よりも、バリエーションが増えていた。周りを観察したり、教え合ったり、子どもたちなりに試行錯誤してひらめいた結果なのだろうと思うと、よく考えて遊んでいることが分かる。2回目の凧あげでは、あがったりあがらなかったりするのには風の強さや風向きなどが関係していること、たくさん風を受けるところがあっても、実際に風がなければあがらないということ、既製品だからといって必ずしもあがるわけではないということなど、疑問や多くの発見・学びがあった。
(実践・情報交換・試行錯誤・観察・疑問)

その後の凧作り制作は、個人の意思に任せることにした。2回実施して、満足した子どもいたからである。12月18日、「先生ちょっと来て～」と呼ばれたので、5歳児の部屋に行くと、得意な表情で新作の凧を見せてくれたS児。「本見て作ってん！」と言う。2回目の凧作り制作の後に、S保育士が凧あげの本を数種類購入して、こっそり本棚に置いていたようだ。それを見つけたS児は時間があれば凧あげの本を見て、作りやすく揚がりそうな凧を選んで、自由時間にコツコツと作っていたようである。それが完成したので、どうやら報告に来てくれたようだ。S児は凧制作と凧あげに面白さを見出したようで「次はこれ作る！」と言って、すでに次の目標が決まっていた。S児以外では、R児やC児が凧揚げの本にとっても興味を示しており、他にも誰かが本を開くと自然と人が集まって、「これ飛びそう」「これもいいな！」など口々に言っただけでは興味津々で見ている姿が見られた。C児は自分から“見て！”と言うタイプではないが、密かに凧作りを続けており、S児ととても仲がいいので、いつもS児の隣りで黙々と凧を作っていた。R児は他の活動ではすぐに飽きたり、なかなかやる気が起こらなかったりしていたが、凧制作はよほど楽しいと思えたのか、S児、C児同様に作り続けていた。その後も部屋をのぞく度、数名が自主的に凧作りをしている姿が見られた。作ることが楽しいようで、作っては戸外に出た時に試していた。散歩の時に風が強いと「今日やったらあがると思うのに～！」と言っていたので、風の強い日にも試してみたが、どの作品もなかなか思うようにあがらなかった。いくつか試したのち、興味は発表会の取り組みへと移行していった。



【考察】 あえて資料を取り入れずに取り組んでみることで、自分なりに作ってみることを楽しんでいた子が多かった。1回で上手くいくよりも、失敗したり上手くいかなかった時の方が、“もう1回！”につながりやすいが、中には解決法が上手く見つからない場合は意欲を失うこともある。そういう場合は傍にいる保育者の関わりや言葉かけが大事になるのであろうと思う。何度も経験するからこそ分かることもあるし、繰り返し取り組む事で理解や面白みが深まり、新たな発想も生まれるようである。保育者自身も凧作りと凧あげを実際に経験してみることで、気になったことはすぐさま調べ、知った情報は周囲と共有し、追求するようになった。追求すればするほどに新たな発見があったので、そのたびに面白みを実感し、どんどんと引き込まれていった。新しい発見があると、ワクワク・ドキドキして面白い。もっと追求したくなるし、試してみたくもなった。このような体験が遊びの継続につながっているように思う。

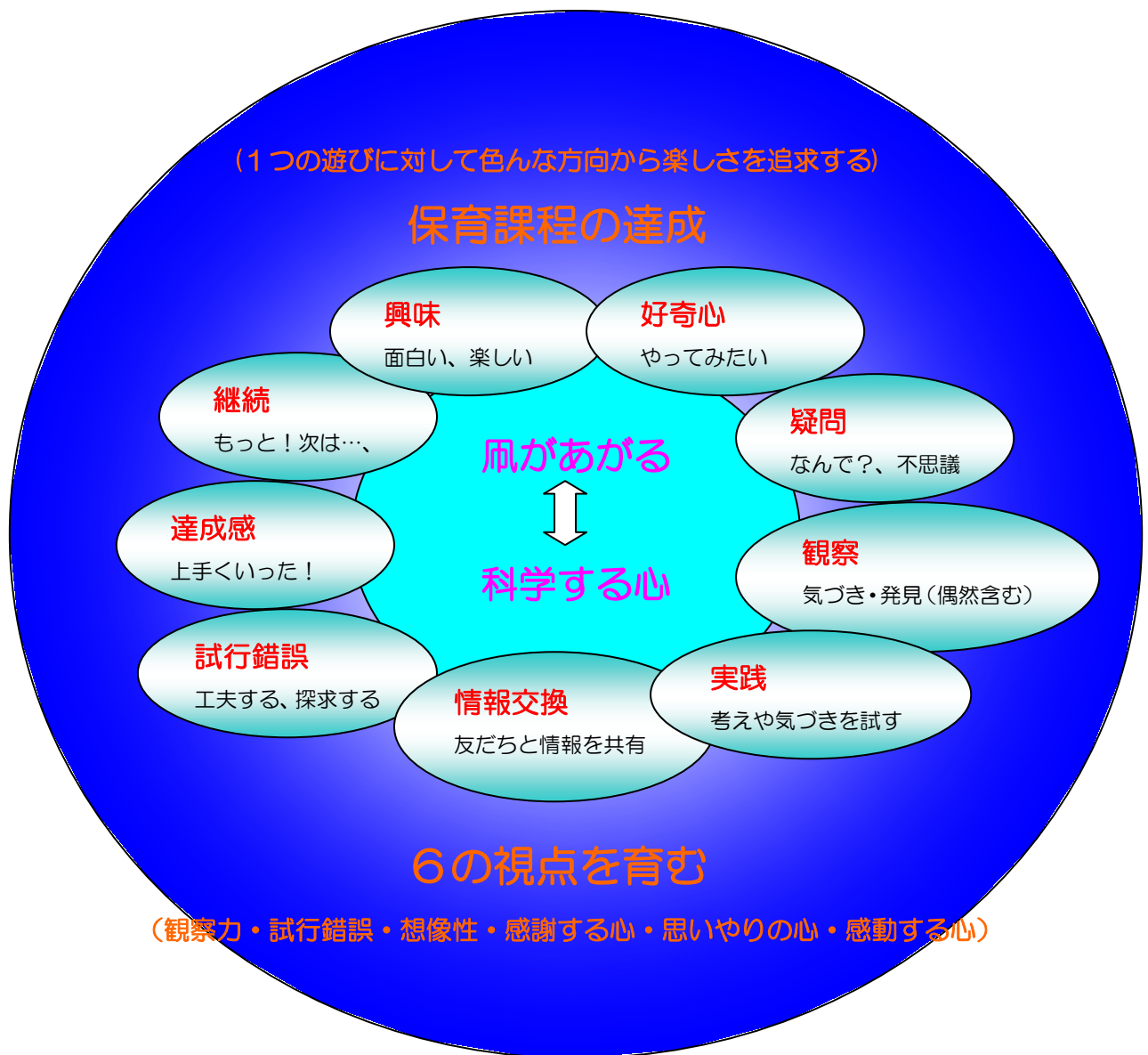
またこのクラスは、3歳児クラスの時に、水に浮く物・沈むものに面白さを見出して、作っては試して…を繰り返し楽しんでいたクラスだったので、今回の凧作り制作も、同じように面白さを見出し、追求したいという思いが生まれ、何度も試していたのかもしれない。（興味・好奇心・疑問・観察・実践・情報交換・試行錯誤・達成感・継続）

4、まとめ

各クラスの凧あげの事例から見えてきたことは、凧あげに対して飽きないで遊び続けていた子どもは、“走り続ける子”だけでなく“希望を捨てない子”だったように思う。強い気持ちを持ち続けることが、何事にも成功に繋がっているのではないかと思う。また、凧がきれいにあがった友だちからのアドバイスには耳を傾ける様子があったことから、全ての友だちのアドバイスをきくと言うわけではなく、上手くあがった友だちに励まされると“もうちょっと頑張ってみよう！”と思うようである。

凧が“あがる”に対しては、乳児には少し浮いただけでも“あがった”と声をかけており、幼児には腕より上にあがった場合に“あがった”と声をかけていることに気がついた。乳児と幼児では出来ることも違うので、各年齢に応じた言葉掛けを自然としていたようである。年齢が上がるにつれて、物事を深く追求する傾向が見られることから、5歳児は“浮く”と“あがる”の違いに興味や疑問を持ったのではないだろうか。そして、実体験を通して、9つの視点（興味・好奇心・疑問・観察・実践・情報交換・試行錯誤・達成感・継続）が相互に絡み、深まりが見られることによって、凧があがり、“浮く”と“あがる”の違いの理解につながったのではないかと捉えた。ゆえに、その9つの視点を深く掘り下げることで自身が“科学する心”が育まれる場面に結びついているのではないだろうか。

また、同じ遊びをしていても、年齢によって楽しみ方や気づきの違いが見られ、捉え方が違っていた。乳児でも、乳児なりに気づきがあったり、その年齢にしか分からない面白さを見出していたことは、それぞれに目の付け所が違い、豊かな感性が育まれているからである。そのため、本園の各年齢における**保育課程の目標を達成**させることが、**風あげ**の事例のように、**1つの遊びに対して色々な方向から楽しさを追求**することにつながっている。保育課程の目標を達成させるには、日々の保育の中で、本園が考える“**豊かな感性と創造性の芽生え**”につながる**6つの視点**（**観察力、試行錯誤、想像性、感謝する心、思いやりの心、感動する心**）を**育む**ことが大切で、それもまた相互に絡み合っ**て主題“科学する心”**が育まれる場面に結びついているのではないだろうか。





順番通りではないこともあるし、
同じ視点を行ったり来たりする

- 0 歳児：興味・好奇心
- 1 歳児：興味・好奇心・疑問
- 2 歳児：興味・好奇心・疑問・観察
- 3 歳児：興味・好奇心・疑問・観察・実践
- 4 歳児：興味・好奇心・疑問・観察・実践・試行錯誤・情報交換・継続
- 5 歳児：興味・好奇心・疑問・観察・実践・試行錯誤・情報交換・達成感・継続

5、今後の課題と計画

毎年凧あげは冬だけだが、季節に関係なく長期にわたって取り組んでみたら、新たな発見や疑問が生まれる可能性があり、面白いのではないかなと思う。また、凧あげの実践を通して、保育者の声掛けや関わり、見守り、環境設定の大切さを学んだ。声かけや援助のしすぎは、子どもの主体的な活動や科学する心を育む妨げになってしまうし、逆にしなさすぎても、遊びが発展せず興味が失せてしまっていて終わってしまうこともある。どのタイミングで援助をしたり環境に変化をもたらすのか、いつまで見守るのか、いかに活動に興味をもたせるか、全て保育者の見極めが大切であり、保育者の働きかけがその後の活動に大きく影響があると感じた。保育者自身も活動に興味を持って楽しむことで、子どもの“やってみたい！”という意欲が育まれると思うので、保育者の言動一つ一つが子どもの発達につながるということをしっかりと心に留めて関わっていききたい。そのためには、やはり保育者自身、“科学する心”が育まれていないと難しいと思うので、今後も些細な事にも目を向けて、心が揺さぶられる体験を子どもたちと一緒にして、共に成長していきたい。

執筆者

三輪 香織